慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	忘れ得ぬ言葉
Sub Title	
Author	青木, 隆(Aoki, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2007
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.80, No.10 (2007. 10) ,p.135- 137
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 中村洸先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20071028-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法律学科の一〇〇年史のための一文を書かれた際に、慶應義塾での国際法の教育と研究について述べられているが、そこで「後世、義塾において国際法の分野にかかわる者は、伝統の上に胡座をかくことなく、」と強調されている。中村先生の愛された慶應義塾を引き継ぐものとして、高い水準の研究と教育を行わなければならないと痛感している。

中村洸先生、先生の思いを次の世代へと伝えてゆくことを心に誓っております。どうぞ安らかにお眠り下さい。

法学部教授　大　森　正　仁

忘れ得ぬ言葉

「ロイターじゃなくてルテールなんですよ。フランス人だからね。」最初に先生からかけていただいた言葉であった。学費値上げ反対運動による大学閉鎖が解除され、二年生に進級して間もなく一九七三年初冬に行われた入ゼミ説明会でのことである。板書された教材を呟くように読んだのを耳に留められて、微笑んでそう仰った。この時以来、学部と大学院でゼミ生あるいは教育補助員として、先生が教育と研究に心血を注がれるのを目の当たりにさせていただいた。

学事等に多忙を極められた前原光雄先生のお手伝で早くから研究会をご担当されたこともあって、一九九二年に先生のご退職と同時に巣立った期まで先生のご指導を受けたゼミ卒業生は、優に三〇〇名を上回る。「慶應出のエリートたれ」、「gloria et honor et paix omni operanti bonum（善行を為す全ての者に栄光と名誉と平和を）」先生が卒業していくゼミ生に餞として贈られた言葉である。

卒業生は皆、この激励に応えるべく、その責務をはたし続けているであろう。ここに機会をいただいたので、同じ時をともに過ごした方々と先生への感謝と哀悼の念を分かち合う縁となることを望んで、不肖の追憶を書き留めさせていただこうと思う。

ようやくゼミ生にして戴いたのが、先生には膠原病との戦いが始まった年であった。のちに、尊敬しておられた兄上を難病で喪われたとき、「兄弟で面倒な病気になるなんて、先祖がよほど悪いことをしたのかな」ともらされた。四谷では、模範的な入院患者として過ごされ、毎朝、早くから外国の文献を読み込んでおられたという。「朝の巡回のとき看護婦さんに寝ぼけた顔を見せられないものね」と冗談に紛らされたが、先生は徹底してご自身を規律して、この病気を封じ込められた。

「子供がいないせいか、学生も大人として見るところがあります。」たしかに、先生は、学生の良識に信を置き、その意思を尊重された。ゼミの運営に対しても決して指図をなさることはなく、メンバーが相談し、納得して行動するようしむけ、これを見守るという姿勢を貫かれた。

「僕は晴れがましいのは苦手なんですよ。みなさん、ご自身の親の誕生日を祝っていますか。」ゼミで先生のお誕生日をお祝いする会の企画案にそう仰った。この会は、年末の納会を兼ねることで先生にご納得いただき、先生のご退職までゼミの恒例行事となった。卒業生も顔を見せたりして、先生にも楽しみにしていただけたと思う。

「僕は業務命令で国際法をやらされたんだよ。」学部ご卒業を前に、指導教授の峯村先生に呼ばれ、前原先生ご同席のもと「『国際法を研究するなら助手にする。』と言われてね、語学の成績が良かったからだってさ。学部の国際法の試験は、ラテン語のフレーズの一つがどうしても思い出せなくて、うまくいったとも思わなかったんだけどね」。刑事法を題材にした法哲学の研究を希望され、「完全主義者だなんて言われる」先生には、とりわけ冷戦期の国際法の研究と教育は厳しい任務であったに違いない。ＯＢ会の折などに述べられた「高等教育の質を維持するために、こっちも懸命にやっています」との言葉どおり、大教授の域に達せられてもなお講義の準備に数日を費やし、いつも外国の教科書の改訂や新しい事例を点検して、講義に反映されておられた。

私には先生のご研究を論評する資格はない。「あの人は

昔から勉強が好きなほうではなかったから」とか「僕は耳学問ができないんでね」など、ときに先生が発される厳しい言葉にわが身を振り返って震え上がった。しかし、喉元を過ぎるよりも前に熱さを忘れて、些かも恩に報いることができないまま今日に至っているのである。それでも、国際法学会での逸話を一つだけ書き留めておきたい。「『余人を以て代え難い』って言われちゃったらね。」国際法学会での研究報告について、おそらく先生が最も信頼しておられた当時の研究連絡主任の理事から依頼を受けられた時の話である。一九八二年の一夏をその準備に費やされた。集めた文献資料は積み上げれば一メートルほどにもなったであろうか。ご報告への反響をうかがったところ、笑顔で「曰く言い難し」と仰った。その理事の先生が「中村先生を引っ張り出して、良い報告をしてもらった。あの先生は本当の学者だから」と愉快そうに語られるのを後に耳にしたとき、あれは、信頼に応え、責任を果たされた満足の笑みであったと確信した。

「犬は口答えしないからね。」最後の愛犬を看取った後、「今からでは、こっちが先に逝っちゃうから、可哀想で」と犬のいない生活を始められた。このときに、また犬を飼うことをお勧めしなかったことは、数多くある後悔の一つである。いま考えれば、このいわゆるペットロスをきっかけに奥様が病に陥ってしまわれたのではなかったか。それでも、先生は「こういうこともあるんだね」と献身的に奥様を介護され、ご自身の生活も以前と変わらずに保たれていた。

先生は慶應を愛し、慶應を愛する人を愛された。「天は人の上に人をつくらずだよ。」先生が地位や権限を振りかざすように振る舞われたのを見たことがない。慶應病院での最後のご闘病にあたっても、担当医を信頼され、一患者として謙虚に誠実に過ごされたようである。今となっては、これを最も近くでお支えした一人が慶應が大好きなゼミ卒業生であったことをせめてもの救いと思うしかない。

中村洸先生　安らかにおやすみ下さい。

清和大学教授　青　木　　隆